

橿原市東坊城遺跡出土の仏画

東坊城遺跡は、橿原市西部、曾我川の左岸に立地する。主に古墳時代と中世の遺構が確認でき、古墳時代の溝からは初期須恵器や铸造鉄斧・鉄滓・鑄羽口などの生産関係遺物のほか、韓式土器や機織具部材などが出土し、渡来系技術者との関係が指摘されている。また、北に隣接する新堂遺跡からも同様の遺物が出土しており、遺跡の範囲はさらに広がるものと考えられる。

今回の調査では、期待された古墳時代の遺構の発見はなく、調査区全体が旧河川やその氾濫層上に立地することが判明した。現地表面下約2mまでは中世以降の氾濫による堆積層である。それより下層は葛城川旧河道と考えられ、古墳時代から中世にかけての土器が出土する。氾濫層の最下層上面からは耕作に伴う素掘り溝を検出しており、中世には幾度かの氾濫を繰り返しつつ、その都度水田として利用された様子が窺える。また、調査区北西部では、梅または桃と考えられる並木を一例検出した。

現在の葛城川は、条里制施行後に造成された人工河川と考えられている。建久二年（一一九一）当時の様子を描いたとみられる磯野庄図（談山神社所蔵）が現葛城川西域に沿っていることから、葛城川の流路改変はそれ以前と考えられるという（秋山日出雄

「大和『飛鳥川』の歴史地理学的研究——弘仁・天長期の大和南部水利政策」（藤岡謙二郎先生退官記念事業会編『歴史地理研究と都市研究』上、一九七八年、大明堂刊所収）。今回紹介する仏画は、流路改変以後の氾濫層から出土した。

仏画は頭部と脚部、左手を欠損するが、右手の第一・二指を結ぶ来迎印を結ぶことから阿弥陀如来を描いたものであろう。光背は二重円相で、身光外円は墨痕を消失するが、光背の大きさから座像と考えられる。また、仏の周囲には蓮弁が描かれており、阿弥陀来迎図と考えられる。

なお、仏画の向かって左側中央部には釘孔が穿たれており、何かに打ち付けられた部材の一部であった可能性が高いが、用途は不明である。

仏画の鑑定については、奈良国立博物館の鈴木喜博氏・中島博氏・谷口耕生氏、帝塚山大学の戸花亜利州氏のご協力を得た。

（橿原市教育委員会 米田 一・寛 和也）

